

平成とともに

八田 正信

私が流通経済大学社会学部社会学科に赴任したのは、平成元（1989）年4月で今年（平成31年）3月に停年を迎える。すなわち平成の30年間を本学で過ごしたことになる。この30年間、国の内外においても、流通経済大学においてもさまざまなことがあった。退職を迎えるにあたって、この30年間についてつらつらと振り返ってみることにする。

私をはじめ流通経済大学を訪れたのは、社会学科が開設する前年の昭和62（1987）年3月であった。社会学科に着任予定の教員の会合に出席するためである。その時の佐伯学長（後の学園長）の挨拶の中に今でも忘れられない話があった。それは「皆さんもご覧になったかもしれませんが、今本学では入学試験の合格発表をしています。今年から受験番号で発表しています。」というものである。すなわち昨年までは受験番号で発表すると連番になるため、実名で発表していたということであった。当時私は四国の短期大学に勤務していたが学生募集が大変で、募集停止を検討していた。「この大学も大変なんだな」というのが流通経済大学に対する最初の印象であった。

翌昭和63（1988）年に社会学部社会学科が開設され（社会学部の親睦会である末広会の名称はこの88に由来している）、私はその翌年の平成元年に赴任した。すると状況は一変していた。経済学部、社会学部ともに競争倍率は二ケタ前後であり、その後社会学科は二十数倍にまで増加した。これは当時第二次ベビーブームの子どもたちが受験期を迎えたのと、バブル経済の爛熟期で受験生が1人で十数学部、学科を受験するのがざらであった。なかには記念受験と称して合格する見込みが全くない大学を受験する生徒もいた。

このような状況に対応するために、文部省（現・文部科学省）は臨時定員増という措置をとった。これは大学の設置基準はそのままにして、一時的に定員を増やすという政策である。本学もその要請を受けて、社会学科では卒業生を出す完成年度の前年に180名の定員に加えて70名を引き受けて、一時定員250名となった。このこともあって入学試験の採点も大変であった。当時はマークシート方式が導入されておらず、すべて人力

による採点で点数についても手集計であった。採点の時には全教職員が1部屋に集められ、3人1組になって夜遅くまで採点にあたった。今にして思えばよい時代だったのかもしれない

次いで思い出すのが新学科の開設である。平成4（1992）年度の社会学科の完成を控えて、社会学部に新学科を開設する計画が持ち上がった。観光系の学科構想となり、その設立準備委員会のメンバーに私も指名された。当時の大学をとりまく状況は、現在と同様に首都圏への学生の集中が問題となっており、地方の大学の学生募集が厳しくなっていた。そこで文部省は首都圏で新しく認可する大学、学部、学科は、福祉系、情報系、その他緊急に人材の育成が必要な分野に限るという方針を立てていた。ここに文部省と設立準備委員会との攻防がはじまる。

まず最初の関門は茨城県が首都圏に含まれるかどうかという問題である。首都圏に関する見解は政府の省庁間にも相違がみられ、ここで文部省がいう首都圏は学生の一極集中という観点のからすれば東京圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）のことであり、茨城県は含まれないというのが本学の主張であった。次いで観光系の学科が「緊急に人材の育成が必要な分野」という点である。当時観光系の学科というと立教大学社会学部観光学科（現・観光学部）、横浜商科大学商学部観光マネジメント学科、宮崎産業経営大学経営学部経営学科、東洋大学短期大学部観光学科（現在はなし）の4学科しかなかった。そこで当時国際的にも「ワーカホリック」と揶揄されていた日本人の仕事に対する姿勢が、今後は余暇の充実に向けられるであろうということ、そしてグローバル化が急速に進展するであろうことから、それに対応するための人材を育成するために国際観光学科の必要性について見解を展開した。

そしてもう一つの問題は定員数であった。当時第二次ベビーブーム後の18歳年齢の急減を見越して文部省は定員について非常に厳しかった。そもそも社会学科の定員180名は1学科の定員としては多く、開設当時は将来的には分割も考えられていたと思われるが、佐伯学長の純増120名という方針のもと、120名を達成するための交渉が進められた。まず最初の対策として考えられたのが、当時増えつつあった外国人留学生のために特別入学枠を設けることであった。また急減する18歳年齢対策としては受験生を高校を卒業した生徒に限らず、当時高まりつつあった生涯学習という風潮から社会人にも大学の門戸を開くということで社会人枠を用意することにした。加えて他大学や他学部、他学科からの編・転入学枠も設けた。

こうして平成5（1993）年4月、定員120人、編・転入学枠20人の社会学部国際観光学科が日本で5番目の観光系の学科として開設された。ちなみにその後「大学設置基準の大綱化」による文部省の大学に対する規制の大幅な緩和に伴い、学際的な学部の新設・改組が相次ぎ、また平成18（2006）年に「観光立国推進基本法」が成立したことも相まって、現在では観光系の学部・学科を有する大学・短期大学は217校にのぼる。

それでは当時の学生について振り返ってみよう。当時間もさまざまな学生がいたが、この頃は大学進学率が30%台だったので、中には熱心に勉学に取り組むものもいた。彼らは現在50歳を目の前にしてさまざまな分野で活躍している。しかし講義中は私語が多いうるさかった。それがある時から静かになった。みんな急に真面目になったのかと思っただが、そうではなかった。それは平成11（1999）年にNTTドコモが、当時急速に普及し始めた携帯電話にiモードの機能を搭載したことによるものであった。すなわち彼らは私語をする代わりにメールでやりとりをはじめたのであった。

また当時の学生は元気がよかった。私の顔を見るとしょっちゅう「先生、コンパしましょう」と言ってきた。私は毎晩、晩酌をしていたので「いいよ。君たちでセッティングするならいつでも付き合うよ」と答えていた。すると彼らは参加者をまとめ、安い飲み屋をさがしてコンパをセッティングして迎えにきた。当時は食べ放題・飲み放題という店はなかったので、安い飲み屋探しも大変だったと思う。コンパで乾杯が終わると、15分もしないうちに卓上の食べ物はみごとになくなった。そしてみんな物足りなそうな顔をするので「いいよ。好きなものを頼みなさい。」と言って自腹でごちそうするのが常であった。

当時は今のようにコンビニが多くなかったため、学生たちにとって夜間の食べ物の確保も大変だったのかもしれない。こんなことが1ゼミ当たり年間4、5回はあった。近年はコンパもめっきり少なくなった。たまにコンパの誘いがあつて承諾しても、セッティングができる学生がおらず、なかなか実現しない。昨年めざらしく1年生のゼミでつくばね祭りの打ち上げをするというので参加したが、ファミリーレストランにおける12時開始の昼食会だった。しかし今にして思えばかつて1年生や2年生と飲み屋でコンパをしていたということは、未成年と飲酒していたということになる。当時はおおらかな時代であった。

かつてはつくばね祭も盛大に開催されていた。多くの研究発表や討論会、展示会が催され、そのために夜遅くまで多くの学生が準備にあたった。模擬店も数多く出店されていた。年を経るにつれてそれも減少傾向になり、とくに新松戸キャンパスが開校するとみるみる少なくなった。私も社会調査の結果発表や模擬店を出店していた。模擬店では「八ちゃんラーメン」というラーメン店を出していた。食材は私の故郷である福岡から豚こつ味の博多ラーメン、北海道から味噌味と塩味のラーメンを取り寄せ、値段は少々高めだったが好評で、毎年みえる常連客が市民も含めてできるほどであった。しかし当初はゼミの学生が中心になって、積極的かつ熱心に店の運営にあたっていたが、年を経るにつれてそのような学生が少なくなり、私がつきっきりでないと店が回らないようになっていった。それでも十数年は続いたが、結局は閉店することになった。

卒業論文の指導のための合宿も行っていた。3年次の春休みと4年次の夏休みに2泊で、他のゼミと合同で行った。発表とディスカッションはゼミ単位ではなく、学生の論

文のテーマによって分けて、春の合宿ではなるべく自分のゼミの所属ではない学生を指導するようにした。最初のうちは午前9時から食事をはさんで午後9時頃まで行っていたが、夕食後の指導は生産性がないということで取りやめ、夕食後は各自発表の準備をしたり、教員が飲酒している部屋で質問をしたり雑談する時間とした。この合宿は他の学生がどういうテーマでどのように卒論に取り組んでいるのか、どのくらい進んでいるのか、また自分のゼミの担当教員以外の教員のアドバイスを受けることができるという点で効果があったと思える。

当時の学生は入学するとすぐに運転免許を取得し、車を所有するものが多かった。その車の大半は中古車でかなり年期の入ったものも多かった。大学の学生用駐車場はいつも満杯で、大学も駐車場の使用にいくつかの条件を付けていたが、すぐに一杯になった。近隣のお宅から違法駐車に対する苦情も増えて、大学は駐車場の確保に大変だったようである。その一方でシャトルバスはいつも空席が多い状態で運行していた。朝早いゼミによく遅刻する学生にその理由を尋ねてみると、夜間遅くまでアルバイトをしていて朝起きられないためという。そしてなぜお金が必要なのか尋ねると、ガソリン代がかかるからと答えた。最近卒業生にその当時のことについて聞いてみると、この近辺を車で夜通し走り回っていたようである。近頃は若者の車離れも言われるようになり、車を所有する学生はめっきり少なくなった。

こう振り返ってみると、平成の30年で大学も学生たちも大きく変わり隔世の感がある。

この5月から新しい元号に変わるが、大学を取り巻く環境も入試制度をはじめとして大きな変革がなされるようである。しかし平成30年間で得られた知見を見つめ直し、前向きに取り組むことで社会学部はさらなる発展が見込まれる。とくに混迷を深める時代こそ、社会学の出番である。先生方の力によって新生社会学部の新しい道が切り開かれんことを祈念する。